

汲古一瞥

「お茶室の書」(一)

中村素堂

加茂の「葵まつり」がすんだ翌日、東山の妙法院御門跡三崎良泉大僧正をお訪ね申し上げた。

大きなご門の左横の新しい門から入り、大きな黒ずんだ庫裡の土間に立つて、大きな声でお取り次ぎを願ひ出ると、「ちよっとお待ち下さい」と、御門主に伺つていただく間に今時珍しいこの古風な庫裡の高い天井を見あげると、真正面に直径三尺あまりの丸い木彫りの額がかけてある。やはり黒々と時代が附いている。やすらかな感じの草字で「得此生二」と書いてある。

「どうぞこちらへ」というご案内に待つほどもなく御門主が見えられ、二、三のお話が交される。言葉のとぎれる間に竹の葉ずれの音が爽かに聴える。

幸いにゆるやかに梵鐘の音が流れてくる。今日は十七日、三十三間堂の方で観音様への催しあるのに気づき、気高い老僧の前を辞して退出する。もう一度、「この生を得」の額をふり仰ぐ、やはりいいなどと思う。さて何というかつ、大切な筆者のことはさらさら忘れて見惚れてしまった。

街の小路の途中で美しい琴の音を聴いたような気持ちで、いつか四条京極の賑やかな街頭に立つて、京都書院画廊というのを探し尋ねてみた。今日をもつてらくとなる。谷辺橋南先生ご社中数十名の人々の、自詠短歌をみずからの筆に托した作品展という催し二階の会場にあがる。京都の人々の拳措がそのまま作品になったようなゆかしさ、読みながら筆致をたのしみ、橋南先生は旅中スケッチの歌とそ地の風光の写真まで出陣というのに、ついまた長座してしまう。

ものやわらかなお人柄が、心やすく人をおかせて下さるせいかもしれない。今日は眼福の多い日である。

午に近い日ざかりを、坂の途中で下車し清水寺の本坊に大西良慶上人をお訪ねする。お取り次ぎの人よりも先に、待つていたよといわぬばかりに、九十三歳の老上人は開け放たれた客殿に入つてこちらを。

お耳が遠いので、お側へよつて大きな声で近況などをお話しする。何かとご親切な垂示をいただいで、その上にもごとなご染筆の色紙までいただいで、こちらのお寺も観音さまのお祭りの日と拝察して、ほどよく拝謝して成就院のご門を出る。

午の食事を祇園に近い宿ですますと、もうおひと方をと、七条の仏光寺御門跡に宗務総長の森博良上人をお訪ねする。今日は宗会議で大変ご多端というのに、この一宗の総理大臣はさりげなく用談をなさつて下さる。

ご大病の予後と承つてもおるので、自分たちの好勝手な用だけ申し上げて、むし暑さが急雨を催してくる直前に宿へ馳せ帰ると、にわか雨にぬれたお眼を拭きながら建仁寺禅居庵の上松義山師が駕をよせられる。

何というご芳情、歓談ひと時、お見送りまでいただいで、奈良の郡山の夕陽の町を博文堂という筆の老舗にたち寄る。

ここのご主人は筆屋さんというより、すこし生ぐさい比丘衆は向かい合いかねるような熱烈な仏弟子で、住居のお宝は仏画、仏具どこかの方丈にいるような心地、朝は全店員もみな誂経礼仏の上で仕事にかかるといわれる。何うと奥さんの方がこの方では先達であつたとのこと。

そして山崎弁栄上人の念仏行推進の機関誌まで出しておられる。うっかりすると筆を買うことなど忘れて、念仏同唱のうちに出てきそうになる。これで心のことた良い筆がでなかつたら不思議というよりはかない。(つづく)

〔筆間雜記〕中村素堂隨筆集昭和六十三年刊より転載。
(「仏教書道」昭和四十一年四月)